



はじめに アセス開発までの経緯

いじめ・不登校は、相変わらず、学校教育の大きな課題です。この問題に取り組むため、平成19、20年度、広島市教育委員会と広島大学大学院教育学研究科、そして市内の小中学校10校が協力して「いじめ・不登校等予防的生徒指導」の実践プログラムを推進してきました。

この取組の直接的な目的はいじめ・不登校を減少させることですが、私たちは、いじめ・不登校自体を直接のターゲットにするのではなく、子どもの対人関係能力を育成し、学校環境への適応を促進することで、結果として、いじめ・不登校を減少させようと考えました。

この2年間にわたる実践では、小学校6校における24人の不登校児童が9人に（62.5%減少）、中学校4校では64人から55人に（14.0%減少）になりました。中学校では必ずしも期待どおりにはいかない面がありましたが、それでも大きく数を減らした中学校もありましたし、小学校ではかなりはっきりとした効果が認められました。また、不登校が減少しなかった学校でもチーム支援が機能し始めたり、10校すべてで児童生徒の侵害感が改善するなどの効果が上がりました。その概要は、『児童・生徒のための学校環境適応ガイドブック——学校適応の理論と実践』（協同出版）にまとめ、紹介してあります。本書でも、ごく簡単にですが、その際のアプローチについて5章でご紹介しています。

ところで、実践するにあたっては、児童生徒の学校環境への適応の実態を把握するとともに、その変化も的確にとらえる必要があります。後述しますが、学校環境への適応は多面的なものですので、当然多面的にとらえる尺度が必要なのですが、既存の尺度では私たちの考える学校環境適応を測定できるものがありませんでした。また利用が可能なものでも、多数の児童生徒を対象に数回にわたって実施すると高額の費用がかかるため断念せざるをえない状況がありました。とりわけ、この取組は平成22年度以降は市内204小中学校全部で取り組むこととなっていたため、どうしても費用のかからない尺度が必要でした。

そこで、私たちは、小中学生の「学校適応感」を総合的に測定する尺度を開発することにしました。開発にあたっては広島市内をはじめ、全国の小中学校の先生方にご協力いただきました。そのおかげもあって小学校3年生から中学校3年生までの学校

環境適応感尺度「アセス」(ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres)が完成しました。完成した「アセス」は先掲書にCD化して付録としてつけました。

さて、このようにして小中学生版「アセス」は生まれたのですが、実は開発の途中から「高校生版をつくってこないか」という依頼がありました。先掲書の出版後はそのような声が直接メールで届くことも増えてきました。中には「高校生にアセスを使ってみたのだけれど、結果は信用できるか」といった質問も少なからず届くようになりました。私たちもその声に応える必要を感じるようになり、今回、小学校3年生から高校3年生まで使える「改訂版アセス」の開発となったわけです。

アセスの開発には数万人の子どもたちとその先生方にご協力いただきました。特に今回の改訂に当たっては、高校の先生方に無理を言ってご協力いただきました。なかには本当にご苦勞をされてデータをとってくださった方もいらっしゃいましたし、「お役に立てば」といってデータを提供してくださった先生方もいらっしゃいました。そのような仲間が全国にいることを心からうれしく思います。ここに記して感謝申し上げます。

今後、この尺度を用いて子どもたちの学校適応支援を進めていただければ、私たちとしても大変うれしく思います。また、さらに正確で有用性の高い尺度に育てていきたいという思いもあります。そのためにはより多くのデータが必要になります。いつかご協力を仰ぐときもあるかもしれません。そのときにはよろしく願いいたします。

このアセスの開発に携わったメンバーは、以下のとおりです。当時は全員広島大学の教員や博士課程の学生でしたが、数年を経て所属が変わったメンバーもいます。ここでは現在の所属を書いております。

青木多寿子 (広島大学大学院教育学研究科)

石井 眞治 (広島大学大学院教育学研究科)

井上 弥 (広島大学大学院教育学研究科)

沖林 洋平 (山口大学教育学部)

栗原 慎二 (広島大学大学院教育学研究科)

神山 貴弥 (同志社大学心理学部)

林 孝 (広島大学大学院教育学研究科)

山内 規嗣 (広島大学大学院教育学研究科)

米澤 崇 (奈良教育大学教育学部)

山田 洋平 (福岡教育大学)

なお、開発にあたっては、私たちと広島大学や岡山大学などの学生たち (たとえば中山真美さん、藤原綾子さん、中上佳子さん、野口泰紀さん、竹嶋飛鳥さん、戸田真弓さん、高橋哲也さん) とで積み重ねてきた研究が下地になっています。さらに、名前は出ませんが、多くの学生たちがデータの入力や分析を手伝ってくれました。このことも記して感謝を述べたいと思います。